

わが貧弱な本棚をみていて、著名人が書いた弔辞の本が何冊かあるのに気づきました。意識して集めているわけではないのですが、気がついたらずいぶん持っている。いろいろな人がさまざまな思いをつづった弔辞は、やはり面白いのです。弔辞を面白いと書いては不謹慎だけど、短くて読みやすい。

短いなりに自分と故人との関係、思い出、寂しさをつめこんでなおかつ聞いている人に感銘をあたえるのだから、下手な文章読本より、役に立つ。その中から見つけた、いちばん短い弔辞を紹介すると。

詩人の草野心平（一九〇三〜一九八八）が、同じく詩人の中原中也（一九〇七〜一九三七）へ書いた弔辞です。「中原よ。地球は冬で寒くて暗い。ぢや。さやうなら。」

斎藤孝編著『送る言葉』（三才堂書店）に掲載されています。ほんとうに葬儀の場で語ったのかどうかは不明ですが、詩人らしい言葉です。

ところで、先ほどから何度も、「弔辞を書く」と表現しています。弔辞は語るものです。なのに、書くという。

文芸評論家であり小説家でもあった丸谷才一氏は自著『挨拶はたいへんだ』（朝日新聞社）で「原稿をきちんとつくって、それを暗記してやる」とのべています。丸谷氏の場合、パーティなどで突然にスピーチを頼まれた時は、「ほとんど断るやつにしている」。なぜなら、原稿がないから。

自分のスピーチだけをまとめて、200ページ以上もある本をつくってしまつような作家でも、いちいち原稿をつくって話すのです。葬儀でのスピーチといえば、遺族の挨拶もあります。

3月18日 彼岸法要後 健康落語一席



立川らく朝
ぶろふいーる

落語家・医学博士。1954年長野県生まれ。杏林大学医学部卒。慶大義塾大学病院内科勤務、同健康相談センター医長を経て、2000年、46歳にして立川志らくに入門。2004年、二つ目昇進。2015年、真打昇進。現在、新作の「健康落語」、「ヘルシートーク」等の新ジャンルを開拓し、月1回の独演会を開催している。主な著書に「笑いで自律神経を整える」（榎出版社）、「ドクターらく朝の健康嘸」（春陽堂書店）等、ほか「CD全集：立川らく朝の健康落語」（ユーキャン）など。



「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった」

なんて、他人の言葉を拝借してもだめ。自分の言葉でスピーチ。

見つけた！

photo Chida kanji

僧侶という立場で、私が実際に聞いて、すごいスピーチだと思ったふたつを紹介します。ひとつは高齢の女性の葬儀後に親戚の方がなされた挨拶です。

その方は、最後まで介護をしたお嫁さんに「ありがとう。あなたのおかげです」と具体的に介護の様子を話してお礼をいわれた。ドラマや小説には登場するシーンですが、現実ではなかなか聞けない挨拶でした。もうひとつ、亡くなったのは高齢の男性。お孫さんが遺族を代表して挨拶をしました。孫といっても、成人された方です。

「お爺さんが年をとって不自由になってから、私の両親はいつも介護のことで喧嘩していました」
そう話し始めて、お祖父さんに教わったことを淡々と聞かせてくれました。少し前のことだけど、今でも鮮明に覚えている挨拶です。

どちらも、日常生活からでた自分の言葉だから、はっとさせられました。自分の言葉でほんとうのことを語ったとき、聞いているものの心は動きます。

だというのは、最近、S葬儀社が遺族から近況を聞き書きして、社員がでつちあげた長くて白々しい葬儀の挨拶状をみました。茫然自失として何も書けないときは型どおりの挨拶で済ませればよいのです。それが真実です。何かを伝えたいならば、自らの飾らない言葉で、四十九日忌や百日忌にご挨拶すればよいのです。

「挨拶」の字も「挨拶」の字も、押すという意味です。『碧巖録』という禅の書物に、「たがいに相挨拶す」という一節があります。おたがいに心の奥底までおしあつてわかりあった仲間という意味です。そんな仲間だから良いスピーチが、書けるのです。他人が書いたものなどお笑いぐさです。

漱石の禪を追いかける旅

お正月に第一次募集した熊本・松山の旅は定員になったので、春は募集いたしません。どうしても行きたい、という方は住職に相談してください。どうかします。

5/25～ 漱石の禪 熊本・松山は満員御礼

漱石の旅は満員だけど、秋には京都・妙心寺への旅をやりませう

今秋、10月14日（日曜日）～

しばらく、本山・妙心寺へお参りする旅行をしていませんでしたが、今秋はします。するからにはめったに行けないところへご案内したいから、只今交渉中。旅程をご案内できるのは、7月はじめになるか、その前になるか。